

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32688

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K11562

研究課題名（和文）「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動が発達障がい児の向社会的行動に及ぼす効果

研究課題名（英文）The Effects of Stage Creation Activities through "Creative Movement & Dance" on the Prosocial Behavior of Children with Developmental Disabilities

研究代表者

大橋 さつき (Ohashi, Satsuki)

和光大学・現代人間学部・教授

研究者番号：60313392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「ムーブメント教育・療法」を土台とした「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動が、発達障がい児の向社会的行動に及ぼす効果を明らかにすることを目的とした。

対象となる放課後等デイサービスの活動記録から、発達障がい児の向社会的行動について抽出し分類した結果、「行動的援助」、「心理的援助」、「緊急的援助」、「協力的行動」、「非表出的行動」の5つのカテゴリーが表出された。さらに、先行研究を踏まえ、「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動が発達障がい児の向社会的行動促進に影響を与える要因として、「身体的同期の豊富さ」と「所属感の向上」の2点を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、発達障がい児が自分のことだけでなく、「私たち・僕たち」という主語を用いて集団全体としての体験を語り成功を喜ぶ姿が見られた。ここに、向社会的行動の積み重ねの先に、子どもたちが「私たち」の視点からのウェルビーイングをとらえることが可能になっているとの気づきを得た。

本研究の成果は、古来より人類の結びつきにおいて必須であったダンスや身体表現の役割を言及し、再構築を求められている日本のインクルーシブ教育において、多様な相互関係の中で個別の支援を実現する新たな流れを生み出すだろう。さらに、社会における共生・共創の縮図的体験を提供していく教育や地域活動の具現化に寄与すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the effects of stage creation activities through "Creative Movement & Dance" based on "Movement Education and Therapy" on the prosocial behavior of children with developmental disabilities.

As a result of extracting and classifying the prosocial behaviors of the children with developmental disabilities from the activity records of the target after-school daycare service, five categories were identified: (1) behavioral support, (2) psychological support, (3) emergency support, (4) cooperative behavior, and (5) non-expressive behavior. Furthermore, considering previous research, two factors that influence the promotion of prosocial behavior in the children with developmental disabilities through stage creative activities through "Creative Movement & Dance" were considered: (1) abundance of physical synchronization and (2) increased sense of belonging.

研究分野：ムーブメント教育・療法、身体表現論、舞踊教育

キーワード：発達障がい児 創造的身体表現遊び 舞台創作 向社会的行動 ムーブメント教育・療法

1. 研究開始当初の背景

(1) 発達障がい児の向社会的行動に関する先行研究から

人は、他者に対する思いやりを支えられた行動や、自分の直接的な利益にはつながらない利他的な行動をすることがある。このような他者や集団を助けようとしたり、人々のためになることをしようとしたりする自発的な行為は、「向社会的行動」と呼ばれており、対人関係を円滑にしたり、相互交渉を活発にしたりする上で重要な機能を果たしている。

特に、発達障がい児の場合は、他者との相互的なやりとりで困難を抱えていることから、一般に向社会的行動が少ないと言われている。発達障がい児の向社会的行動に関する研究において取り上げられている要因としては、相手の行動の意図や目標の理解、感情理解や相互交渉スタイル、「心の理論」があげられている。しかしながら、向社会的行動の遂行との関連が明らかにされているこのような個人内要因は、共感性や役割取得、感情理解など、発達障がい児が最も苦手とする能力であり、これらの能力を高めることによって向社会的行動を促進するという方法には限界があるだろう。発達障がい児の向社会的行動に関する研究動向としては、苦手な部分を明らかにするだけでなく、向社会的行動の生起過程や発達に関する知見を取り入れながら、どのような状況、条件であれば、発達障がい児も他者に対する援助や協力を実現できるのかという点について、検討する必要があるとの論が見られる。すなわち、発達障がい児の向社会的行動においては、個人要因だけでなく、状況要因(環境要因)についての検討が必要であり、他者の存在や場を関係論的にとらえた上で、どのような環境が向社会的性を育むのかという視点に立った研究が求められている。

(2) 「創造的身体表現遊び」を活かした発達障がい児支援と舞台創作活動の実践研究から

一方、研究代表者自身は、発達障がい児支援において、運動遊びを原点とした発達支援法である「ムーブメント教育・療法」を基盤に、ダンスや身体表現の要素を特化した独自の「創造的身体表現遊び」の実践研究を続けてきた。特に、発達障がい児を対象とした集団プログラムの継続的な実践から、幼児期、学童期の発達障がい児の主体性の高まりや、身体運動や認知の面はもちろん、コミュニケーション能力や社会性、自尊感情の面でも効果があることを明らかにした。集団活動において他者と共に動く喜びを体験する中で「かかわりたい」という欲求を育むための環境づくりを重視してきた。

また、インクルーシブな場づくりとして、舞台創作活動の実践にも取り組んできた。元来、ダンスや身体表現活動は、多様性を受容し包括し合う資質を育む力を有しているが、教育現場では様々な行事として「発表」という形式に実施される中で、「出来映え」を意識しすぎることによって、共生教育の視点が見失われることも多く、発達障がい児にとっては参加困難な状況となってしまう。しかし、「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動は、発達障がい児も含め様々な違いのある人たちが一緒に楽しむことができている。その特徴は、「遊んでつくる！舞台でも遊ぶ！」を合言葉に、舞台上演を最終的な目標としながらも、実現のための手法として、極力「練習」や「稽古」といった活動を避け、あくまで遊びとして活動を積み上げるといった点にある。さらに、それらを可能にした実践法として、環境との対話を活かした即興表現を充実させる、自分たちで創ったという実感を大切に、分かち合いの体験の積み重ねから発表へと自然な展開に導くといった方法を見出している。

実際に、地域支援における市民参加型の舞台づくりにおいても、放課後等デイサービスにおけるダンス発表会の取り組みにおいても、参加した発達障がい児は、活動全体の充実度と比例して、他者に対する援助や集団としての成功を優先した言動が増える等、向社会的性の変容が見られた。よって、継続して取り組んできた自らの「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動において、かかわった子どもたちの様相から、発達障がい児の向社会的行動を促進する効果を有しているのではないかと仮説を立てた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、代表者らが実施してきた「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動が、発達障がい児の向社会的行動を促進するとの仮説のもと、その効果について明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究は、「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動が発達障がい児の向社会的行動の及ぼす効果について明らかにするために、これまで代表者と共に「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動に継続的に取り組んできた放課後等デイサービスの実践を対象とした。(調査時、登録者は小中学生30名程で、その7割は週2日以上の利用であった。)

本研究は、3年計画で実施した。初年度である令和3(2021)年度は、まず、【研究】として、発達障がい児の向社会的行動や向社会的行動の調査尺度に関する先行研究調査(文献調査)を行

った。その上で、【研究 Ⅰ】として、これまでに発達障がい児が参加した「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動の実践記録をもとに、向社会的行動の変容について考察した。また、活動の中で、発達障がい児がとった向社会的行動の特徴と場面を明らかにするために、映像や日誌による活動記録の分析、スタッフや対象児とその保護者へのアンケート調査、インタビュー調査を行った。

2年目の令和4(2022)年度は、【研究 Ⅰ】と【研究 Ⅱ】をもとに、【研究 Ⅲ】として、発達障がい児の向社会的行動の促進をねらったモデルプログラムを考案し、「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動を実践した。対象児らの向社会的行動について、VTR撮影及びフィードバックによる観察記録のデータを収集した。あわせて、【研究 Ⅳ】として、スタッフ、保護者らに対するアンケート調査及びインタビューを実施し、発達障がい児の向社会的行動について調査を行った。【研究 Ⅴ】で得た家庭や教育現場の具体的なニーズと照らし合わせながら、【研究 Ⅵ】で考案するプログラムの可能性や課題について検討を重ね、必要な改良を加えながら展開した。

最終年度である令和5(2023)年度は、研究総括(【研究 Ⅶ】)として、学会発表の他、単著「子どものウェルビーイングとムーブメント教育」(2024年5月、大修館書店)にまとめ公表した。

4. 研究成果

(1) 本実践における発達障がい児の向社会的行動の分類

【研究 Ⅰ】「発達障がい児の向社会的行動や調査尺度に関する先行研究調査」と【研究 Ⅱ】「過去の記録映像を対象とした対象児らの向社会的行動の分析」を行った。実践記録から抽出された向社会的行動の具体的な内容を分類した結果、「行動的援助」「心理的援助」「協力的援助」「緊急的行動」「非表出的行動」の5つのカテゴリーが表出された(表1)。

表1: 放課後等デイサービスで観察された発達障がい児の向社会的行動

カテゴリー名	定義	例
行動的援助	被援助者の活動に対する具体的援助が生起するもの	他児の着替えを手伝っていた。/ スタッフが遊具を出そうとするのに気づき手伝った。/ 相手にあわせて遊具を投げる高さや強さを調整していた。
心理的援助	配慮や慰めなど、心理的側面へのアプローチが高い行動	落ち込んでいる他児に、優しく応援の言葉をかけた。/ 他児の発表に拍手で応えた。
緊急的援助	緊急性が高い行動	発表前の準備ができなくて困っている他児のことをスタッフに伝えきた。/ けんかをとめようとした。
協力的行動	集団活動を円滑にするために行われるサポートや活動への勧誘行動	「練習始まるよ～」と全体に声をかけていた。/ 踊り出しのタイミングを全員で合わせようと身体を大きく動かして伝えていた。
非表出的行動	向社会性に基づく、具体的援助が生起しない行動	他児が課題を達成するまで怒らずに待っていた。/ 本番一人ずつダンスを発表する場面で、他児が遅れたため、決められた割り当て分より短くなってしまったが、笑顔で踊ることができた。

(2) 「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動が

発達障がい児の向社会的行動促進に影響を与える要因

【研究 Ⅲ】【研究 Ⅳ】の成果と先行研究と照らし合わせ、「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動が発達障がい児の向社会的行動促進に影響を与える要因として、以下の2点を考察した。

身体的同期の豊かさ

先行研究によれば、身体的な同期は他者に対する印象や態度を変化させ、向社会的行動を増加させ、同期した動きによって援助行動が増える等の報告がある。また、音楽プログラムの継続により向社会的行動をする傾向が低かった子どもの行動に変化が見られたと報告もある。これらは、身体的同期が他者との情動的な関係性の土台構築に役立つことを示唆するものである。「創造的身体表現遊び」は、ムーブメント教育・療法にダンスや身体表現の要素を強化した活動であり、他者と同じリズムで身体を動かす身体的同期を行う要素は、活動の中心的要素である。同じ空間を共有する者同士の共感性を無意識的な段階から高め、創発的な共同行為の土台となり、向社会的行動を促進すると考えられる。

「所属感」の向上

子どもが向社会的行動を学習していくには、他者に対して向社会的行動をとることが期待される環境に置かれることが前提条件であり、所属コミュニティに対する愛着の強さが向社会的行動につながるというモデルが確認されている。集団としての目標を共有し、協同問題解決の共創プロセスに参加することが向社会性の促進と関連する。「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動は、発達障がい児にとって「居場所」としての機能を果たしている。子どもたちは、互いにかかわって遊び、一緒に創作活動を繰り返す中で、次第に仲間意識が芽生え思いやりのある言動も増えていた。振り返りの場面では、「私たち・僕たち」という主語を用いて集団全体としての体験を語り成功を喜ぶ姿も見られた。様々な遊び活動の中で「他者との共有体験」を重ね、「自

己意識・他者意識」に焦点を当てた表現活動、個々の主体性を大事しながら集団として発表の場を盛り上げていく展開が、「我々(私たち)」の感覚を無理なく育む取り組みにつながっていると考えられる。

(3) コロナ禍を経て、里山公園における屋外パフォーマンスへ

- 発達障がい児のウェルビーイングと地域全体のウェルビーイングの相互関係への気づき -

発達障がい児の向社会的行動促進に影響を与える要因に関する考察結果を踏まえ、発達障がい児の向社会的行動の促進をねらったモデルプログラムを考案し、「創造的身体表現遊び」による舞台創作活動を実践した。研究計画の通り、対象児らの向社会的行動について、VTR撮影及びフィードノートによる観察記録のデータを収集し、スタッフ、保護者らに対するアンケート調査及びインタビューを実施し、発達障がい児の向社会的行動について調査を行った。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の影響が続き、計画より舞台発表の回数や参加人数等の規模が縮小されたため、最終年度である令和5年(2023年度)にも舞台発表の実践を追加することになった。

このように、やむを得ず追加した実践研究により、本研究は新たな展開を得ることとなった。具体的には、感染症の影響を受け、放課後等デイサービスの施設内で発表に制限がかかる状況が続いていたことを機に、地域団体の協力を得て、近隣の里山公園の使用が可能になり、屋外でのパフォーマンス発表を目指した活動に発展した。その結果、地域住民の交流の場である野外施設(里山公園)を創作・発表の場にできたことで、より地域に開かれた活動となり、地域関係者と連携が増し、かかわる人々が喜びを共有しながらインクルーシブな活動に発展していったという実感を得た。もちろん、コロナ以前も、発表会という形で開催することで、保護者以外にも対象児の担任教師や福祉関係者等を観客として招待することが叶い、舞台発表という場が、発達障がい児にかかわる大人たちが無理なく集う場として、地域の教育と福祉の連携に役立つことができる手応えを感じていた。しかし、本研究における新たな展開として、元より地域の自然環境の一部として存在する里山公園を活動の場として得たことにより、地域コミュニティの中で育っていく発達障がい児を支える関係づくりに大きく貢献できるのではないかと考えた。発達障がい児の向社会性に限らず、一人ひとりの子どものウェルビーイングのために、地域全体のウェルビーイングを高めることの必然性とこれまでの実践を応用できる可能性を強く感じるようになった。本研究の取り組みの中で、新たに生まれた研究課題である。今後、全ての子どもたちと地域のウェルビーイングを増進する多世代共創型の身体表現遊びのプログラムを開発することを、さらなる課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 南雲麻衣・大橋さつき	4. 巻 66(4)
2. 論文標題 「間(あわい)」でゆらぎ、新しい「私」に出会う	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 女子体育	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松島誠・松島礼・大橋さつき	4. 巻 65(4)
2. 論文標題 いのちに触れて踊り、満ち足りるいのち	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 女子体育	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田かずよ・大橋さつき	4. 巻 64(1)
2. 論文標題 インタビュー 踊ることで自分の身体を好きになる	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 女子体育	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大橋さつき
2. 発表標題 共生・共創を目指した舞台づくりとウェルビーイング
3. 学会等名 第2回ウェルビーイング学会学術集会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大橋さつき
2. 発表標題 障がい児のウェルビーイングと身体表現遊び
3. 学会等名 第74回舞踊学会大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大橋さつき
2. 発表標題 「気になる子」が育つ姿を見取るための視座　ムーブメント教育・療法におけるMEPA-Rの評価を活用して
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大橋さつき
2. 発表標題 子どもの発達を支える身体表現遊びの環境 - 共生・共創を目指した舞台づくりの実践から -
3. 学会等名 日本ダンスセラピー協会第31回学術研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大橋さつき
2. 発表標題 「創造的身体表現遊び」を活かした舞台創作における発達障がい児の向社会的行動
3. 学会等名 日本発達障害学会 第56回研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大橋さつき	4. 発行年 2024年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 230
3. 書名 子どものウェルビーイングとムーブメント教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------